

《二》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「学校で何かあったのか？」

「……………」

直球で訊かれた俺が言葉を詰まらせていると、父はごくごく喉を鳴らして、明るいままの声で続けた。

「いきなりびしょ濡れで帰ってきて、あんなに深刻な顔してんだもんなあ。しかも、帰ってすぐに腹が減ったなんて言い出すのも珍しいだろ？ さすがの俺でも、何かあったんだろうなって思うぞ」

「別に、深刻な顔なんて——」

言いながら背後を振り向いたら、

「してた、してた」

と父はからかうように笑う。

俺、そんなに深刻な顔をしたのか——。

正直、^①自分としては心外だったけれど、そういえば、景子さんに言われたことがあった。学校から帰ってきたときの俺の顔を、毎日、父は観察しているのだと。

「まあ、別に、深刻ってほどのことじゃないんだけど」

俺は、後ろを振り返ったまま言った。

「そうか。それなら、それでいいけどな」

父はグラスをテーブルに置き、コツン、という乾いた音を店内に響かせた。

チ、チ、チ、チ……。

客席の壁かけ時計が秒針の音を漂わせ、^②窓の隙間からは雨音が忍び込んでくる。

母がいなくなつてから、この家に一気に増えた静けさ。父が X だからこそ、ふと黙った瞬間の静けさがい
つそう深く感じられるのだと思う。

外で突風が吹いて、店のシャッターがガタガタと大きな音を立てた。

「心也」

父が俺の名を呼んだ。いつもと変わらぬ、野太くて明るい声色で。

「え？」

「とりあえず、うどん、あつたかいうちに食べちゃえよ」

「あ、うん」

俺はカウンターに向き直り、止めていた箸を動かした。そして、食べながらふと気づいた。

父は、わざと俺の後ろの席に座ってくれたのだ。

少しでも俺がしゃべりやすくなるように。

「うめえか？」

「うん」

それからしばらく父は黙ってビールを飲んでいた。

俺も黙々と箸を動かした。

そして、半分くらい食べたとき、なんとなく自然な感じで俺の口が動いてくれたのだった。

「あのさ」

と、焼うどんを見ながら言った。

「おう」

「うちの『こども飯』のことなんだけど」

「……………」

背後の父は返事をしなかった。でも、ちゃんと耳を傾けてくれている気配は感じられた。

「そろそろ、やめない？」

③ ああ、言っちゃったな——、そう思いながら焼うどんを頬張ったら、なんだか少しだけ味がぼやけた気がした。

父は、少しのあいだ何も答えなかった。しかし、ふたたび店のシャッターがガタガタと音を立てたとき、いつもと変わらず野太くて、でも、いつもより少し穏やかな声で言った。

「学校で、何か言われたのか？」

俺の脳裏に、④ あの汚い落書きの文字がちらついた。

「別に、言われたわけじゃないけど」

嘘はついていない。言われたのではなくて、書かれたのだ。俺は心のなかで自分自身に屁理屈を言っていた。すると、

「くくくく」

と、父が笑い出した。

「なに？」

俺は箸を手にしたまま、思わず後ろを振り向いた。

「ほんとお前って、昔から嘘が下手なのな」

「は？ 嘘なんて——」

「まあ、いいけどよ」父は美味そうにビールをごくごく飲んで、「ちょっと想像してみろよ」と言った。

「想像？」

「ああ。『こども飯』をやめた俺と、その後の食堂をイメージしてみろって」

「……………」

「しかも、自分から進んでやめたんじゃないやなくて、どこぞの部外者の言葉に屈して『こども飯』サービスをあきらめた俺と、子どもたちが来なくなったこの食堂と、そうなった店に学校から帰ってくる自分のこともな」

⑤ 想像をしかけて、すぐにやめた。まじめに想像をするまでもない。というか、すでに胃のあたりが重くなっていたのだ。

俺が、何も答えられずにいると、ふいに父はやわらかい目をした。

「なあ心也、死んだ母ちゃんは賢^{かし}かっただろ？」

「え？」

「その母ちゃんが、言ってたんだ」

「……………」

「人の幸せってのは、学歴や収入で決まるんじゃないやなくて、むしろ『自分の意思で判断しながら生きていくかどうか』に左右されるんだって」

「……………」

「あ、お前、その目は疑ってるな？」

「いや、べつに」

「いまのは俺の言葉じゃなくて、本当に母ちゃんの言葉だからな。しかも、国連だか何だかがちゃんと調べたデータらしいぞ」

「分かったよ、それは」

「よし。てなわけで、死んだ母ちゃんの教えどおり、俺は自分の意思を尊重しながら生きる。やりたいようにや

る」

父はニヤリと笑って、ビールをあおった。

「……………」

なるほど、やっぱり俺の意見は流されるってことか。

そう思ったら、言葉にならないもやもやが胸のなかで膨らみはじめた。^⑥俺はふたたび父に背中を向けた。そして、黙って焼うどんを口に運んだ。少し冷めてしまった麺は、さっきよりも粘^{ねば}ついていて、風味も落ちた気がした。それでも、かまわず食べ続けた。

すると、背後で、また、コツン、という乾いた音がした。

父がビールのグラスを置いたのだ。

「ちなみに、だけどな」

穏やかな父の声を、俺は背中^はで撥ね返そうとして無視をした。でも、父はかまわず言葉を続けた。

「心也が不幸になると、自動的に俺も不幸になっちゃう」

「……………」

「だから、心也が不幸になるんだったら、俺は『こども飯』をやめるよ」

「……………」

「それが、やりたいようにやると決めている俺が、自分で決めた意思だ」

咀嚼^{そしやく}した焼うどんを飲み込んだ。

店内がふたたび静かになって、時計の秒針と雨の音がやけに大きく聞こえはじめた。

^⑦「なんだよ。マジかよ。やめるのかよ。」

俺に、胃が重くなるような未来を想像させておいて、やめるのかよ——。

そもそも自分からやめて欲しいと言ったのに、いざ父が賛成してくれたら、それにも不平を言いたくなくなって、胸の奥おくのもやもやがむしろ一気に膨張ぼうしてきた。正直、少し息苦しいほどだった。それでも、俺は、焼うどんを頬張ほった。そして、いつもよりしつかりと嚙かんだ。背中に父の存在を感じると鼻の奥がツンとしてきそうだったから、必死に嚙むことに集中したのだ。

やがて、静かすぎる店のなかで、俺は焼うどんを完食した。

皿の上にそつと箸を置き、背中越こしに言った。

「ごちそうさまでした」

少し、声がかすれてしまった。

「おう、美味かったか？」

母がいなくなつてから、何度も、何度も、父と俺のあいだで交かわされてきた短い言葉のやりとり。

ちよつと腹が立つから、今日くらいは⑧イレギュラーな返事にしてやれ、と俺は思った。

「まずかった」

ぼつりと言ったら、背後で父が吹き出した。

「あはははは。心也、お前なあ——」

「……………」

「ほんと、死んだ母ちゃんによく似てるわ」

俺はあえて振り返らずに、空になった皿を見下ろしていた。

すると父が、ますます愉快ゆそうに続けた。

「母ちゃんも、お前も、嘘をつくのが下手すぎなんだよなあ」

その言葉に肩かたの力が抜ぬけて、フツと笑いそうになった瞬間、なぜか同時に鼻の奥が熱あつくなってしまつて……、

⑨
それから俺は、しばらくのあいだ後ろを振り向けなかった。

(森沢明夫『おいしくて泣くとき』ハルキ文庫)

問一、——線部①とありますが、それはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次のア～オの中から
選び、記号で答えなさい。

- ア、自分ではそんなつもりはなかったのに、とても深刻な顔をしていると言われたから。
- イ、学校から帰ってきた時に、父が今日も自分の顔をじっくり観察していたから。
- ウ、今日学校であった出来事について、父がすでに知っていたから。
- エ、真剣な話をしようとしても、父がいつもふざけていて聞いてくれないから。
- オ、本当にお腹がすいているだけなのに、無理をして嘘をついていると思われたから。

問二、——線部②で使われている表現技法を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、対句　　イ、体言止め　　ウ、擬人法　　エ、倒置法

問三、Xに入れるのに最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、無口な人　　イ、陽気な人　　ウ、神経質な人　　エ、まじめな人　　オ、穏やかな人

問四、——線部③とありますが、心也が話し出しやすいように気づかう父の行動が最もよくわかる一文を文中からぬき出し、初めの五字で答えなさい。

問五、——線部④とありますが、どのような内容だったと考えられますか。

問六、——線部⑤とありますが、それはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、身勝手な父のことで頭がいっぱいになり、自分のことを考える余裕ゆゆうがないから。
- イ、想像することがとても苦手なので、無理にしようとすると混乱してしまうから。
- ウ、普段は厳ひしい父が何も答えられずにいる自分に対し、やさしく語りかけてきたから。
- エ、母のアイディアで始めたことを、簡単にやめるわけにはいかないと思い直したから。
- オ、「こども飯」をやめた父と食堂の今後に対して、暗い未来しか感じられなかったから。

問七、——線部⑥とありますが、それはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次のア～オの中から
選び、記号で答えなさい。

- ア、父に学校の話をしたが、母の話ではぐらかされてしまったから。
- イ、父が母のことを賢かったとほめていたのが、照れくさかったから。
- ウ、父は話を聞いてくれたが、意見を受け入れてはくれなかったから。
- エ、父がずっと話しているせいで、なかなか焼うどんを食べられないから。
- オ、父はいつも自分が中心で、息子のことなど全く心配していないから。

問八、——線部⑦について、次の1・2の問いに答えなさい。

1、父はなぜ「やめる」と言ったのですか。文中の言葉を使って三十字以内で答えなさい。

2、この時の心也の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、勇気を出して「こども飯」をやめて欲しいと父に言ったところ、おどろきながらも自分の気持ちを理解してくれただけ安心している。

イ、せっかくな焼うどんをおいしく食べていたのに、「こども飯」をやめるという暗い話題を持ち出してきた父に不満を感じている。

ウ、「こども飯」はやめないという言葉聞きたくてあえて「やめない？」と言って見たのに、父が本当にやめると言ったためいかりをおぼえている。

エ、自分から「こども飯」をやめないかと言ったにもかかわらず、実際に父がやめてもかまわないということとを口にしたためとまどっている。

オ、父が「こども飯」をやめたら子どもたちが来ないだけでなく、自分の居場所もなくなってしまうことがっかりしている。

問九、——線部⑧とありますが、いつもはどんな返事をしていると思われるか。

問十、——線部⑨から読み取れる心也の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、母のことを聞かされるのはつらかったが、母と過ごした日々を思い出してなつかしく思っている。
イ、父から死んだ母によく似ていると言われたことがうれしくて、母のことをこいしく思っている。
ウ、父に嘘をつくのが下手だからかわれたことがぐちゃぐちゃで、なんとかしてやり返したいと思っている。
エ、自分の気持ちを父に見すかされてはすかしくなったが、落ち着きを取りもどしたいと思っている。
オ、自分のことをだれよりも理解している父に対して、悪いことを言ってしまったと申し訳なく思っている。

問十一、現代の日本には子どもについての様々な問題があります。次の①～③の中からテーマを一つ選んで問題点をあげ、その解決方法を書きなさい。

- | | | |
|----------|------|-------|
| ①スマートフォン | ②食生活 | ③運動能力 |
|----------|------|-------|

《二》 次の1～5の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1、コムギコを混ぜる。
- 2、糸を下にタらす。
- 3、家の中心のハシラ。
- 4、商品をバイバイする。
- 5、新幹線にジヨウムする。

《三》 次の1～5の——線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- 1、道徳の授業。
- 2、残暑が厳しい。
- 3、油性のマジック。
- 4、蚕を育てる。
- 5、易しい文章。

《四》 次の1～5の——線部の敬語の使い方が正しいものには○をつけ、まちがっているものは正しい敬語に直
しなさい。

- 1、先生の本を拝見しました。
- 2、お客様が私の家に参りました。
- 3、作品をご覧になりますか。
- 4、先生はお茶をお飲みしますか。
- 5、父がよろしくとおっしゃっていました。

《五》 次の1～5の（ ）にあてはまる言葉を後のア～カの中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じものは二度使えません。

- 1、（ ） そんなことはあるまい。
- 2、（ ） 雪が降ったら、大きな雪だるまを作ろう。
- 3、（ ） その国に行ってみたい。
- 4、一生けん命勉強したので（ ） 不安はない。
- 5、明日は（ ） 晴れるだろう。

ア、少しも	イ、ぜひ	ウ、まさか	エ、どうか	オ、たぶん	カ、もしも
-------	------	-------	-------	-------	-------

《六》 次の 1、3 は、それぞれ共通する部首をつけて別の漢字を作ることができません。その部首名をひらがなで答えなさい。なお、() 中の数字は部首の画数を表しています。

【例】反・目 (4) ↓きへん

- 1、土・申 (4)
- 2、由・寺 (6)
- 3、失・広 (8)

《七》 次の 1 ～ 11 の に漢字一字を入れたとき、同じ漢字が入る組み合わせを五組作りなさい。また、その漢字をそれぞれ書きなさい。

- 1、二階から目
- 2、 の顔も三度
- 3、芸は を助ける
- 4、 は急げ
- 5、立板に
- 6、たで食う も好き好き
- 7、知らぬが
- 8、良 は口に苦し
- 9、一寸の にも五分のたましい
- 10、年寄りの冷や
- 11、 から出たさび